２１	西尾	西尾中学校 佐久島しおさい学校	氏名　○小林　弘幸　ｺﾊﾞﾔｼ ﾋﾛﾕｷ 氏名　　江口　慎一　ｴｸﾞﾁ ｼﾝｲﾁ

分科会番号　　２０	分科会名　　総　合　学　習

テーマ 単元名	島に誇りをもち、未来を切り拓く子供の育成 ～資質・能力の育成を目指した、しおかぜ学習の実践より～

１　はじめに

９年間の学びを積み上げることのできるカリキュラムを通して、一人一人の子供の夢の実現を目指して、2019 年４月に佐久島小学校と佐久島中学校が一緒になり、新しく義務教育学校として佐久島しおさい学校が開校した（資料１）。

資料１　佐久島しおさい学校

全校児童生徒は前期課程１５名、後期課程１１名の２６名であり、島の「人・もの・こと」との出会いに重点を置き教育活動を行っている。

島の学校、義務教育学校として、校内で何を大切にしていくかについて話し合った時に、子供が自分の人生をよりよく生きるための『資質・能力』の育成に焦点を当てた教育、**「子供の視点に立った学び」**を改めて大切にしていくことが決まった。子供の視点に立った学びとは、子供を中心に各教科や行事等を含めた学校の教育活動の各要素が円のように並んでいるとイメージしている。子供は教育活動（教科等や行事）を通して、それぞれを学びながら、そして、学んだ知識や技能等をつなげたり、活用したりしながら、教育活動全体を通して成長していく（資質・能力が育っていく）と考える（資料２）。島の「人・もの・こと」と出会い、義務教育を終えた後も、自らの力で未来を切り拓いていく子供に成長してほしいと願い、本論文の研究主題を、以下のようにした。

資料２　子供の学びの捉え

島に誇りをもち、未来を切り拓く子供の育成　～資質・能力の育成を目指した、しおかぜ学習の実践より～

２　研究のねらい

（１）目指す子供像

しおかぜ学習を通して、４つの資質・能力を身につける子供

目の前の子供につけたい心と力について先生方からアンケートや聞き取りを行い、本校が目指す子供が求める心と力を四つの観点で整理し、それらをカリキュラム全体で取り組む「資質・能力（対象への愛着・興味、多様な価値観を受け入れる心、問題を解決する力、コミュニケーション力）」とした（資料３）。今回は、総合的な学習の時間（しおかぜ学習※本校での呼び名）での取り組みにおける子供の変容を示す。令和４年度までは、学年ごとの目指す資質・能力を示していたが、令和５年度から個別の目標を設定して取り組んでいる。

学校の研究主題	島に誇りをもち、未来を切り拓く子供の育成 ～資質・能力の育成を目指した、しおかぜ学習の実践より～

目指す子供像	島にある人・もの・こととの出会いを通して、島（故郷）への愛着や誇りを感じる子供		島の人・もの・ことから学んだことを、自分の未来を切り拓く力へと変えていく子供	
資質・能力	人・もの・ことに興味・愛着の気持ちをもてる心（以下　対象への興味・愛着）	地域や他文化、他の価値観を受け入れる心（以下　多様な価値観を受け入れる心）	粘り強く問題を解決する力（以下　問題を解決する力）	コミュニケーションをとり、自分の考えを表現する力（以下　コミュニケーション力）

四つの資質・能力　ベンチマーク		対象への興味・愛着	多様な価値観を受け入れる心	問題を解決する力	コミュニケーション力
	5	関わった人・もの・ことを自分事として捉え、できることを見つけて取り組もうとすることができる。	自他の考えの多様性に気づき、新たな見方や考え方をもつことができる。	問題に対して自分だけでなく、他者も納得できるような説得力のある結論を導き出すことができる。	自分の思いや考えをより多くの相手に理解してもらえるように、伝え方を工夫し、広く発信することができる。
	4	対象と積極的に関わり、詳しく知り、よさを捉え直すことができる。	自他の考えやものの見方の違いを肯定的に捉え、受け入れることができる。	調べた情報を整理・分析し、自分の考えを再構築することができる。	理由や根拠を明確にし、自分の考えに自信をもって相手に分かりやすく伝えることができる。
	3	関わる対象と自分とのつながりを深めたいという気持ちをもつことができる。	自他の考えやものの見方を比べ、違いを捉えながらそのよさに気づくことができる。	自分の考えをもとに、問題を解決しようと調べるなど、行動に移すことができる。	相手の考えを踏まえ、柔軟なやりとりをすることができる。
	2	関わる対象のよさに気づき、愛着をもつことができる。	自他の考えやものの見方の違いに気づくことができる。	疑問を見つけ、それに対して自分なりの考えをもつことができる。	伝えた自分の考えに対する相手の考えに耳を傾けることができる。
	1	身近な人・もの・ことへの興味をもつことができる。	新しい友達や初めて関わる人たちに興味をもつことができる。	自分の知りたいこと、やってみたいことを見つけることができる。	身近な相手に自分の思いを伝えることができる。
	0	身近な人・もの・ことの存在に気づく。	不思議だな、面白そうだなと感じ取る。	身近な相手に自分の思いを伝えたいと思う。	

資料３　本校の教育活動全体で育てる資質・能力

（２）研究の仮説

《仮説》４つの資質・能力を身につけることを意識し、しおかぜ学習に取り組めば、島に誇りをもち、自分の未来を切り拓く力を身につけることができるだろう。

（３）仮説に対する手立て

【手立て①】 島の出会いを大切にした体験活動	島の人をテーマにした課題を設定し、一人一人に担当を決めて取材活動や体験活動を重ねることで、「対象への興味・愛着」を養うことができるだろう。
【手立て②】 取材活動や体験活動の回数を重ねる	取材活動や体験活動を重ねることで、取材相手の思いや考えを知ったり、それをより知るための質問をしたりする「コミュニケーション力」を養うことができるだろう。
【手立て③】 調べてきたことをもとに自分の考えをもつ場の設定	自分にはなかった視点や他者の考えに触れられるように、話し合いの視点を意識し、各自が調べたり、体験したりしたことを、他者に伝えたり、自分の考えを整理したりする時間をもつことで「問題を解決する力」を養うことができるだろう。
【手立て④】 他者と話し合う場の設定 シンキングツール（レーダーチャート）の活用	話し合いの視点を意識し、他者と話し合う機会を設ける。シンキングツール（レーダーチャート）を活用することで、自分や友達の考えの違いや共通点、理由について考えるなど「多様な価値観を受け入れる心」を養うことができるだろう。

（４）抽出児童について

前期過程（小学）３、４年生の実態をとらえた個別の目標を設定し、手立ての有効性を検証する。なお、「段階」の内容と数値は、下の表と対応している。矢印左の数値が子供の単元前の段階、矢印

右の数値が単元を抜けた後に目指す段階を示している。

段　階	子供の実態	個々の目標と手だて
子供Ｂ 興味・愛着 ２→３	もの事のよい面を捉えて、身近な「人・もの・こと」への興味をもつことができる。ただ、見える部分しか理解できていない。	関わる対象のよさに気づき、愛着をもつことができるように、**今まで知らなかった島民の良さに気付けるような取材活動や体験活動を設定する。** 手立て①
子供Ｃ 問題解決 ２→３	いろいろなことに興味をもち、自分の知りたいこと、やってみたいことを見つけることができる。ただ考えをもつことで満足してしまっている。	疑問を見つけ、それに対して自分なりの考えをもてるようにするために、**取材活動でもった疑問や思ったことを聞き、何が分かったのか振り返る時間をもつ。** 手立て③
子供Ｄ コミュ ２→３	島の人を相手に素直に感謝や自分の思いを伝えることができる。自分の考えを強く通そうとするので、友達の意見を素直に聞き入れることができない時がある。	相手の考えを汲み取り、柔軟なやり取りができるようにするために、子供**の関心に合わせて、出会いや体験的な活動をする機会を設ける。** 手立て②
子供Ａ 多様な価値 ３→４	島に愛着をもっており、周りの意見に耳をかたむけながら、意見をまとめるように努めている。自他の考えやものの見方の違いに気づくことができている。	自他の考えやものの見方を比べ、違いを捉えながらそのよさに気づくことができるように、**取材活動の後の友達との話し合いの場では司会を務め、学級全体の意見をまとめる役割を与える。** 手立て④

（５）単元構想（５０時間完了）（３・４年しおかぜ学習　髙須智弘教諭の実践より）

〇佐久島の「すごい」について考えよう（３）①　〇佐久島のすごい人を知ってもらうための計画を立てよう（３）

〇島の人について知るために、見学しインタビューしよう（10）②③　〇島の人のすごいところを報告し合おう（４）④

〇他の人のところに行って、見学しインタビューしよう（10）⑤　〇島の人のすごいところを報告し合おう（４）⑥

〇佐久島スーパーマンを表す「すごい」を考えよう（５）⑥⑦　〇「佐久島スーパーマン」を多くの人に知ってもらいたい（７）⑧

〇島の人にもＣＭを見てもらい、感謝の気持ちも伝えよう（４）⑧

３　研究の実践と考察

（１）「佐久島スーパーマン」のすごいところは？手立て①子供Ｂ（興味・愛着）

前年度に島内を歩き、佐久島やたくさんの方に興味をもった子供たち。今年度はさらに島への愛着を深められるように、まず子供たちがよく知っていると思っている島民の方が、自分たちが気づいていないところでどんなことをしているかを知る活動を行った。

教室で子供たちに「よく知っている島民は誰ですか？」と聞くと、子供Ｂは真っ先に「一雄さん」と答えた。一雄さんは、島で民宿「ちどり」を営んでおり、太鼓の先生として、学校行事にもよく顔を出してくださる、気さくな方である。「一雄さんってどんな方か教えて。」と聞くと、「ちどりをやっている。」「ふるさとの太鼓の先生。」と返ってきた。しかし、その後が続かない。「それだけ。」と聞くと「それだけ。」と返ってきた。子供たちは知っているようで、実は深くは知らないことに気づいた。「家の近くで漁もやってたりするけど、私は見たことないから、知らない。でも、見たことがないだけで、いろいろやってると思う。」という子供Ｂの発言から、次の時間にやっていることを聞きに行く事にした（資料４）。島の人に焦点を当てた体験活動を設定することで、今まで知らなかった一雄さんの一面に興味をもち、もっと知りたいという気持ちをもつことができた。よって、手立て①は有効であったといえる。

教師　：よく知っている島民は誰ですか？
子供Ｂ　：一雄さん。
子供Ｄ　：稲葉さん。
子供Ｃ　：私は一雄さん。
教師　：一雄さんってどんな方か教えて。
子供Ｂ　：ちどりをやっている。
子供Ｄ　：ふるさとの太鼓の先生。
教師　：それだけ？
子供Ｄ　：うん、知っているのそれだけ。
教師　：もっといろいろあるでしょう。
子供Ｂ　：**家の近くで漁もやってたりするけど、私は見たことないから、知らない。でも、見たことがないだけで、絶対いろいろやってるとも思う。**
教師　：じゃあ、聞きにいってみようか

【　資料4　授業記録　】

（２）インタビューでわかったことを伝え合う手立て③子供Ｃ（問題解決）

インタビューに行くと一雄さんは喜んで、自分のやっていることやその思いについて子供たちに語ってくれた。その中で子供Ｃはインタビューの後半に疑問に思っていた「どうしてやらなくていいこととかをいろいろやっているんですか？」と聞いていた。そのインタビュー後の授業記録が資料５である。

子供Ｃ：一雄さんは泊まりに来ている中学生のためのキャンプファイヤーの準備とか、けがをしないよう溝をふたで埋めているんだって。
子供Ｄ：４歳から漁師の経験をしているからすごい。ぼくはもう８さいだけど漁師は絶対にできない。
子供Ｂ：太鼓は小学生の頃からやっていて、６０年もやっていたんだって。学校の太鼓の先生もぼくだったらそんなに長くできない。
子供Ａ：そうそう。学校の太鼓の先生も４０年やっているんだって。
教師　：なんでそんないろいろやっているんだろうね。
子供Ｃ：**一雄さんは、とくに観光に力を入れていて、観光は「まごころ」が大切だって言ってたよ。だからやらなくてもいいこととかはなくて、全部やっているからすごい。**
教師　：それがやっている理由なんだね。
子供Ｃ：そうか。**まごころが大切だと言ってたけど、それだけじゃぼくはできない。ずっとやってるからすごい。**
【　資料5　授業記録　】

教師が「なんでそんないろいろやっているんだろうね。」と聞き返すと、子供Ｃは「一雄さんは、とくに観光に力を入れていて、観光は「まごころ」が大切だって言ってたよ。だからやらなくてもいいこととかはなくて、全部やっているからすごい。」と答えた。そこで「それがやっている理由なんだね」と問い返した。すると「まごころが大切だと言ってたけど、それだけじゃぼくはできない。ずっとやってるからすごい。」という反応から、子供Ｃが感じていた「どうしてやらなくてのいいことをやっているんだろう」と感じていた疑問を解決することができた。以下は、授業後の子供Ｃの振り返りの感想である。

一雄さんの知らなかったことを教えてもらいました。ぼくが一番心に残っている言葉は、「まごころ」です。**やらなくてもいいことをやるのは「まごころだから」という理由がすごいからと思いました。**
【　資料6　子供Cの振り返りの感想　】

「やらなくてもいいことをやるのは「まごころだから」というのがすごいからと思いました。」という記述から、子供Ｃが自分の考えをもとに問題を解決しようと行動して話し合うことで、見た目のすごさだけでなく、内面のすごさに気づき、疑問に思っていた問題を解決することができた。よって、手立て③は有効であったことがわかる（資料６）。

（３）一雄さんの船に乗っての漁師体験手立て②子供Ｄ（コミュニケーション）

話し合いを終えた次のしおかぜ学習の時間に子供Ｄは一雄さんの漁をする船に乗る体験活動を行った（資料７）。子供Ｄはこの学校に入学して漁をするためにボートに乗るのは初めてで、「今日、ボートに乗るじゃんね。」と朝の登校途中で下学年の子供たちに話す姿から、わくわくする様子が伝わってきた。子供Ｄは、一雄さんが前日に海に仕掛けておいてくれた網を引き揚げて魚を捕まえる仕事を体験した。初めは一雄さんから距離を置いていたが、一雄さんの指示でゆっくりと網を引き揚げると、水中から魚が見えてきた。「あ、でっかいのがとれた！」と子供Ｄが言うと、「網から魚を獲る時は丁寧に取るぞ。傷つくと魚が弱っちゃうし、かわいそうだからな。」と一雄さんからの話を聞き、最後はやり方を聞きながら自分から網を手繰り寄せて魚を引き上げることができた。

【資料7】漁体験する子供

今日はかずおさんのふねに乗らせてもらいました。ぼくはぎょせんに乗るのは初めてで、朝からドキドキしました。魚がたくさんとれたのでよかったです。**かずおさんのおかげだと思います。あと、魚はゆっくりとるというのも心に残っています。また漁を体験させてもらって、一雄さんのことをもっと知りたいです。**
【　資料8　子供Dの振り返りの感想　】

体験をした後の子供Ｄの感想である（資料８）。

下線部の部分から、子供たちの関心に合わせた出会いや体験的な活動をする機会を設け、回数を重ねることで、相手の考えを汲み取り、子供Ｄがだんだんと柔軟なやり取りができるようになったことから、手立て②が有効であったことがわかる。

（４）一雄さんのすごさを話し合ったり、レーダーチャートで整理したりする。

手立て④子供Ａ（多様な価値観）

体験活動から帰ってきた子供たちは、取材で感じた一雄さんのすごさを口々に話し始めた。

子供Ａたちがそれぞれ感じたことを話し合う中で、自分の感じたすごさを伝えたり、友達の意見を聞いたりすることによって自他の考えやものの見方の違いを知り、それを聞き入れ島民のよさにさらに気づくことができるよう、学級で意見交流する場を設けた。（資料９）

子供Ａはこの話し合いで司会を務めた。３・４年生の複式学級の中で４人中唯一の４年生である。自他の考えや友達の見方や考え方の違いをまとめながらも、そのよさに気づくことができるように司会を務め、学級全体の意見をまとめる役割を与えた。少人数での話し合いでは、いつも通り素直に思っていることを口にしながら話し合いが進んだ。

子供Ａ１：一雄さんのインタビューからすごいと思ったこと発表してください。
子供Ｃ２：キャンプファイヤーなど島のために活動しているのがすごいと思いました。
子供Ｂ３：ぼくは太鼓を６０年もやってきたことがすごいと思う。ぼくはまだ3年しかやってないし、そんなに長くできない。
子供Ｂ４：一雄さんは、あみとかの道具のことも頭に入っているし、それで次に何をするかも頭に入っているのがすごいと思います
子供Ａ５：いろんな意見が出てきたけど、みんなの中で一雄さんのすごいところの一番は何ですか。
子供Ｂ６：ぼくは太鼓とかの技術だと思う。
子供Ｄ７：賛成だけど、魚を捕る技術もすごいよ。
子供Ａ８：私は太鼓を６０年も続けていることだと思う。
子供Ｄ９：ぼくも。
子供A10：技術と続けていることの２つがすごいってことだね。

【 資料9　授業記録 】

このような話し合いを重ねる中で子供たちは、「技術がすごい」「継続がすごい」など、取材をもとに「すごさ」の根拠について伝える姿が見られた。そこで、島の人の「すごい」ところを「思いやり」「技術」「知識」「継続」「勇気」の５つのポイントで整理し、よりどの項目が「すごい」のかについて、レーダーチャートを活用して、各自が考えを深めた。

各自がワークシートをもとに、一雄さんの「すごい」について５つの項目で話し合いを行った。数値をもとに、「なぜそう思ったのか」など、根拠を示しながら話したり、友達の話を聞いて数値が変化したときは、「どうして変化したのか」など、考えを深めたりする姿が見られた。

	友達の考えを聞いて、新しくすごいと思ったこと、納得したこと（振り返りシート）
子供Ａ	一雄さんの知識のことで、子供Ｄさんの「一雄さんは、あみとかの道具のことを頭に入っているし、それで次何するかも頭にはいっているのがすごいと思います。」という意見はとても、納得しました。技術では、ハンドルの操作を使いこなして、人に教えられるのが確かにすごいと思いました。

資料 10　授業を終えての振り返り

子供Ａはレーダーチャートを使った話し合いでも司会を務め、レーダーチャートの各項目について、「なぜ、その数値のしたのか。」それぞれの理由を聞いたり、考えが変化した友達には「なぜ、変わったのか」と問い返したりしながら学級として、一雄さんのレーダーチャートを完成させた。

この振り返りから、「子供Ｄさんの～に納得しました」など、友達の意見の違いを受け入れた上で、自分にはなかった視点に気づき、それぞれのよさに気付けたことから手立て④の各自が調べてきたことをもとにして話し合いの場を設定したり、レーダーチャートを活用したりしたことは有効だったことがわかる（資料 10）。

４　成果と課題

（１）成果（子供の変容について）

子供	段階	「変容」と考察
子供Ｂ	興味・愛着２→３	「もっと知りたいという気持ちをもった。」 関わる対象と自分とのつながりをつかみたいという気持ちをもったと考えられる。
子供Ｃ	問題解決２→３	「見た目のすごさだけなく、内面のすごさに気づき、疑問に思っていたことを解決することができた。」 自分の考えをもとに問題を解決しようと話し合うなど、行動しようとする姿が見られた。
子供Ｄ	コミュ２→３	「漁を体験させてもらって、一雄さんのことをもっと知りたいです。」 体験的な活動をする機会を重ねることで、相手の考えを汲み取り、だんだんと柔軟なやりとりができるようになった。
子供Ａ	多様な価値３→４	「一雄さんは、あみとかの道具のことも頭に入っているし、それで次に何をするかも頭に入っているのがすごいと思います」という意見はとても納得しました。」 司会を行い、意見をまとめることを通して、友達の意見の違いを受け入れた上で、自分にはなかった視点に気づき、それぞれのよさに気付けた。

子供一人一人に対して、個別に資質・能力を育てる目標を設定し、手立てを行うことでそれぞれの子供がベンチマークの１つ上の段階へと変容したと考えられる。よって手立て①②③④は有効であったと考える。

(2)今後の課題

①チーム学校、チーム佐久島での取り組み

４つの資質・能力についてベンチマークを作成し、学校全体で共有することで、９年間を通して、子供一人一人を見とり、手立てを考えることができ、チーム学校としての取り組みが今後より重要になっていくと考える。また、これらの目標を地域の方と共有することでより、地域での活動を通して子供が育っていく土台を作ることができるのではないかと考える。チーム学校、チーム佐久島として、これからも子供の学びを支える仕組みづくりを行っていきたい。

②子供の学びを軸にした教科等横断的な取り組み

子供Ａは、国語の「みんなで新聞をつくろう」の学びの中で、一雄さんを紹介する新聞を作成した（資料11)。ベンチマークの「コミュニケーション」の４の段階「理由や根拠を明確にし、自分の考えに自信をもって相手に分りやすく伝える。」を意識した取り組みが国語で行われていた。今回のように子供を中心に、総合的な学習の時間の内容を国語の学びを活用して伝えるなど、教科等の枠を超えて、子供の資質・能力を育てる取り組みが今後一層求められると考える。

資料 11　国語の時間に作成した新聞

５　おわりに

子供達は、1 年間のまとめとして、「佐久島スーパーマンカード」を作成した。島の方と出会い、体験や取材、お互いの学びの共有を繰り返し行い、自分たちが感じた「すごい」を伝えるために考え、まとめる活動を通して、子供達は、島に誇りをもち、未来を切り拓く力を少しずつ身に付けてきたと考える。９年間、一人一人に寄り添う教育活動をこれからも大切にしていきたい。